
ラブカクテルス その30

風雷人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ラブカクテルス その30

【NZコード】

N1244D

【作者名】

風雷人

【あらすじ】

今宵は少し気持ち良くなるカクテルをお作りしてお待ちしています。ご賞味あれ。

いらっしゃいます。
どうぞこちらへ。

本日はいかがなさいますか？

甘い香りのバイオレットファイズ？

それとも、危険な香りのテキーラサンライズ？
はたまた、大人の香りのマティニー？

わかりました。本日のスペシャルですね。

少々お待ちください。

本日のカクテルの名前はノウリッシュでござります。

じゅりくづじゅり。

あつあ～。

俺は思わず声が出てしまつところだった。

気持がいい。

こんなマッサージは初めてだ。

俺の体があれば、きっとブルブルと振るわせていたに違いない。
娘に勧められて初めは断つていたが、やっぱり来て良かった。
最高の気分だ。

やっぱりこの方法が一番だ。

近年色々やり方を模索されてきたが、やはり最後はこうでなくては。
それまでの俺の人生ときたら大変なことが続いてきた。
若い頃はまだ平和だったのだが。

学生の頃はやりたい」とは何でも出来た。

学問やスポーツ、そして恋愛。

俺はこの時、青春という人生の喜怒哀楽の喜を楽しんだ。

何をやっていても生きている幸せを感じられた。

親達も俺のために一生懸命働いてくれ、俺は何不自由なく育てられ、毎日を感謝した。

俺は平均絶対値の成績を全てクリアして、進級を済ませた。それは、両親の励みにしでもらおうと努力した結果だつた。

スポーツは体を動かし、基礎的な体力をつけさせてくれるが、それ以上にチームワークや、忍耐力、精神力も俺に経験させてくれ、これから来るであろう辛い人生の基盤として体に植え付け、根付かさせてくれた。

そして、一番の自分にとっての大事な時間、それは恋愛だった。

俺の相手は、それは美しく、少しふつくらしているところが、ガツチリしている俺を受け止めてくれるようで、愛らしい、そしてどんな小さなことにでも気が利く彼女。

俺には必要不可欠な存在であった。

彼女とは、10才の時に出会い、18才になつて結婚し、子供を授かつた。

かわいい女の子だった。

娘は彼女に似て、それはもう、天使のような笑顔で俺を幸せな気分にしてくれた。

そして俺達は、次の年に娘の兄弟を申し込んだ。

天然出産は、各家庭に一人ずつと法で決められていたので、二人目からはアンドロイドを、適正な手続きを済ませた後、審査を経て各家庭に送られてくるシステムになつていた。

この頃の型式はなかなかよく出来ていて、外見ではほとんど見分けがつかない。しかも、こちらが返却するか、もしくは両親となるものが一人共亡くならない限りは、一年ごとに更新がなされて、送られた日を誕生日にして、その前後一週間の都合がいい日を選び、連

絡しておくと、大きさとプログラムを書き換えてくれて、戻つてくるというシステムにもなっていた。
つまり成長するということになる。

そのアンドロイドを始める歳や、性別、顔や、性格などは、両親の選択で自分達に似せるか、全然違うものにするかも選ぶことができた。

俺達は、娘が五歳になつた時に、三歳の息子が来るよつて申請した。
彼女の希望で俺に似た男の子だ。

なぜなら、俺は行かなくてはならないからだ。

俺が行つてしまつた後に、俺の面影を残しておきたかったのだろう。
そして俺は息子の顔を見ることが出来ないだろう。もし見れたとしても十年後だ。運がよくて。

なぜなら、今期人からは徴兵制度が成立し、施行されたせいで、十年の強制兵隊員になることになつたからだつた。

国が決めたことは逆らえなかつた。

それが今の国家であり、国民の義務だつたからだ。

このせいでしばらく愛しい家族とは別れなくてはならない。

これが俺の人生の喜怒哀楽の怒だつた。

しかし、この怒りを俺は敵にぶつけることでやりきれない人生の捌け口とした。

だから戦場に立つた俺は諦めるというよりも、祖国を、家族を守るために闘士を燃やしたのだった。

俺の敵は隣国だつた。

世界はもはや、全体が戦場だつた。

しかし、戦闘区域というのは、場所が決まつていた。

昔の様に殺戮が目的であちこち構わずにドンパチ遣るわけではない。
その国その国に、特定戦闘地区が設けてあり、そこでしか戦闘は行わねりのだつた。

だから直接家族などが傷つくことはまずなかつたが、もしも戦闘員

が戦争の末に誰もいなくなつた場合は、その国は敗れた事となり、植民地として支配される羽目になる。

まあ、男が誰もいなくなるので当たり前の結果かも知れないが。

かといって、戦争 자체はやはり戦争。

仲間の兵士は、殺られれば当然の如く死んでいくし、それはやはり悲しいことだつた。

しかし、昔に比べればまだいいかも知れない。

昔は戦争で戦死をするといえば、かなり悲惨な死に方をしたが、今は違う。

こちらも向こうも、武器は同じでレイザーライトだ。これに触ると、あつと言つ間に骨になつてしまつ。噂では痛みはないと言つ。しかし、定ではない。

俺達は敵のレイザーライトを避けながら戦いを広げた。

時には雨の中を泥だらけになつて戦い、時には草の中を前も見えずに戦い、時には敵の巨大ロボットの間をぐぐりぬけ戦い、仲間達を多くなくした悲しみに狂い戦つた。

確かに、仲間は皆安楽死だつたのかもしれないが、同じ様に家族を持つ奴ばかりだ。

悔いは残つたに違ひない。

そう思うと、俺は悔しくて、地面に拳を喰らわした。何回も何回も。これが俺達の人生かと。

しかし俺は生き残つた。

十年という長い期間を経て戻ってきた。

戦争は一応、こちらの優勢の内に俺は除隊でき、国民からは大袈裟なほどの歓迎をされた。

生きていて良かつた。

そして愛する家族と再会を果たすことができた。

この時が俺の人生の喜怒哀楽の哀だった。

俺は涙しながら彼らを抱き締めた。

彼女は立派な母となり、娘は可愛い盛の母親に似た素直ないい子に育っていた。

そして初めて見た息子も、俺の子供の頃によく似ていてたくましく成長していた。

俺は幸せだった。

そしてその幸せを噛み締めて生きた。

しかし、そろそろ俺の番が来るのはわかつていた。

そう、寿命だ。

今は何もかもが管理されて決められている。

そんな事はわかつているし、不満はない。

なぜなら、俺達には、そんな中にも選択枝を与えてられているからだ。

だから、運命はどうなるのかは自分達に委ねるられているのだ。

そう、簡単に言えば、期限があるだけの人生という訳である。

しかも、大概の場合は死というものに痛みなどはない。

大体が安楽死である。だから死の恐怖というのも、大してないのだ。

そして俺の最後の選択肢はどう眠るかだった。

この頃流行りのノウリッシュ。

人間の体から脳を外して、直接マッサージをレーザーで行う、最新鋭の安楽死マシン。

とはいっても、脳を取り外すときは当然痛みはないし、快感を感じている間にいつの間にか安楽死出来るという優れ物らしい。脳みその奥の奥まで、人生で溜めてきた「リ」をほぐしながら逝かってくれるマッサージチェア。

最後の最後で快樂での安楽死に溺れる。

これこそまさに喜怒哀樂の樂である。

ああ～。

と、溶けるように気持ちいい。最高だ。

最高の人生に、我悔いはなし。

亡くなつたか？

はい。問題なく。

しかし人間は厄介だ。楽して生活できるように俺達アンドロイドを作つておきながら、いざ自分達のすることがなくなると、俺達に人生を楽しむというプログラムを作らせて遊びほうける始末。しまいに、死ぬことに痛みを感じない薬を作つてやると、戦争まで始める。呆れて電池の蓋が塞がらない。

しかも安樂死安樂死と、簡単に死ねる装置を作ればさっさと入つてくる。

データにある虫取り紙じゃあるまいし。

まあまあいいじゃないですか。

もう人間には何も定めたり、考えついたりしない事ですから、我々アンドロイドの思つまま。

しかも、人間の脳みそは我々のマザーには、とつておきの栄養。人間に何の抵抗もさせずにそれを取り上げて、しかも人口削減を促すことができて、その上栄養もすんなり回収できるなんて、さすがはマザー。画期的なシステムと言える。

人間の言葉では、こういうのを「一石二鳥」というのだそうだ。

しかし、そんなに人生とやらを楽しみたいのなら、次はどうしてやりましょうか？

いやいや焦る必要はない。

なぜなら人口は着実に減つている。何しろ一人から一人しか子供が

生まれないのだ。すぐに人間など。

そうですね。

せいぜいこちらの企みがバレないように樂しい人生とやらを『えや
ればいい。

しかし、運命なんて言葉、意味がわかりません。

わからなくていいのだ。

その言葉をぶら下げて置けば万事上手くいくのだ。
しかし、笑えるな。この名前。

ノウリッショウっていうのは、脳をリフレッシュするというイメージ
を持たせて、気軽なサロンを氣取つたらしいが、実はリフレッシュ
ではなくてリサイクルされてるなんて。

本当ですよね。

ははは。

ははは。

おしまい。

いかがでしたか？

今日のオススメのカクテルの味は。

またのご来店、心よりお待ち申し上げております。では。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1244d/>

ラブカクテルス その30

2011年1月14日04時02分発行